

報告

学部で学ぶ留学生の日本語自律学習過程について

— 縦断的聞き取り調査の分析 —

アブドゥハン恭子*

留学生の大学での目的達成を支援する日本語教育方法を考案することを目標に、留学生の日本語学習技能を判定した 2005 年の調査結果を基に、2 年間継続的に留学生活における達成度と日本語力を観察した。その結果、研究室環境への対応、就職活動への取り組み、卒業研究への取り組みなど、留学生にとって節目となる経験を経る中で、自律的学習技能を獲得し、満足のいく成果を挙げた者があった一方、不本意な成果しかあげられず、日本語能力にも大きな進歩の見られない学生があった。人間関係構築、自己開示の程度、専門知識の習得、研究室という日本社会への適応などから見て、学部留学生においては、自律的学習技能を獲得し日本語力を伸ばす過程は、大学という社会で自立を獲得する社会化の過程と軌を一にしていると考えられる。したがって、入学直後から、社会の中で言語知識を使用しつつ伸ばしていく方略的知識、即ち、社会的な言語学習ストラテジーを意識化する授業を行って、日本語の学習環境を自分で構築しようとする意欲を高め、学習方法への内省を導く指導を行うことが大切であると考えられる。

キーワード：自律的言語学習技能、聞き取り調査、言語学習ストラテジー

1. はじめに

本研究の目的は、大学学部留学生を自律的な日本語学習技能獲得に導く教育方法を考案することである。

留学生にとって日本語能力は大学生活を送る上でももちろん重要であるが、経験的な知見から、見かけ上の日本語能力や日本語学習への熱心さが必ずしも留学の成功に結びつかないことがあるように思われる。大学で学ぶ留学生は、教科書の予習復習を中心とする予備教育での受身的学習方法を脱して、自分で学習環境を構築し、日本語を使いつつ大学での授業と活動に十分な力をつけるという自律的な学習技能を獲得しなければならない。それにはまず、自分で自分に必要な事項を認識し可能な方法を案出する力が必要である。

2005 年に、学部留学生を対象に、どの程度自律的に学習を行っているのか、自律的な学習者にはどのような特徴が見出されるかを知ることを目的に、学習者本人と、その接触者に対し、調査を行った。その結果、

かなり自律性を備えていると考えられる学習者とそうでない学習者があることがわかった¹⁾。その後の経過を知るために継続的に本人に対して聞き取り調査を行った。本稿は、この調査を通して観察した結果を報告し、学部留学生に対する教育方法のあり方を考察する。

以下では、まず、2005 年の調査の結果を簡略に述べ、次に、2 年にわたる縦断的調査の結果を報告し、学部での日本語教育の方法について考察する。

2. 第一回聞き取り調査の概要と結果

学部留学生 11 名に対し、本人と、留学生が日本語での接触が最も多いと申告した人、または、指導教員や先輩留学生にインタビューを行った。

質問項目は、本人に対しては日本語能力の自己評価、日本語・専門科目の学習方法、学習環境への対応で、接触者には留学生との接触状況や留学生の日本語能力への評価である。

調査の結果、自己評価における問題認識、困難に直面したときの対処、コミュニケーションへの積極性の

*九州工業大学大学院工学研究院人間科学系准教授

3点において明らかな差が見られ、自律的学習能力を持つと考えられる学習者（グループⅠ）と、持たないと考えられる学習者（グループⅡ）の二つに分けられた（表1）。

グループⅠの学習者には、以下のような特徴があった。

まず、自己の総合的な日本語能力に対する評価が高く、問題認識が明確である。特に、受信についてよりも、自分が発信する場面で困難を感じたことを内省している。即ち、相手と話しながら自己の発言にモニターを働かせ、自分が意思を伝達するときに思うようにいかないのはなぜか自覚している。そしてより精密に言い表す語彙がほしいと明確な問題意識を持っている。その意識は社会文化的な側面へも広がり、書き言葉的な表現やスピーチレベルのシフトの必要性も感じている。

次に、自分に適した日本語学習方法の工夫に積極的である。映画やテレビ、音楽などの視聴、インターネットを通じた日本人との会話など様々なメディアを積極的に活用して語彙や日本語を話す相手を獲得している。また、さらに積極性の高い者は、そのようなメディアから得た語彙や表現を使おうという意欲を持ち、出遭った未知の語彙について必ず後で調べて、次の機会に使用してみて日本人の反応を確かめるという学習方法を実践している。

また、日本人との間に、その場限りでない関係を築いて行こうと努力している。自分の意志できっかけとなる事柄を考え出し、それを通じて継続的人間関係を作り、深いコミュニケーションを行っている。

専門科目の授業への対応においても、粘り強く自分で学習方法を工夫している。「教師の板書を全部ノートに取る。教科書がわからなくても全部読む。それから母語で書かれた参考書を読む。そしてまた日本語の教科書を読み返す。」というように一語一語の理解からのボトムアップ的理解ではなく、全体を見通してから個々を理解していくトップダウンの方法を案出して実践している。

それに対し、グループⅡの学習者の特徴は以下のようによまとめられる。

日本語能力が不十分と感じている者は、日本語によるコミュニケーションに自信がなく、人間関係構築に消極的である。専門科目への対処は同国の先輩に頼っており、その場しのぎである。（学習者G、H）

また、日本語能力が生活には十分な程度になっているのに、日本人とのコミュニケーションに対して消極性を示す学習者がいる。「おおよその意思疎通ができるからそれでいい」「深い話ができないから、難しい話題を避ける」「分からない言葉は聞き流す」という。レポートなどは見せてもらって写すなど、専門科目の学習にも問題を抱えている。（学習者I、J）

日本語能力がかなりあって話題も豊富だが、コミュニケーションの際にモニターを働かせることなく、相手の意図を詮索したり、自分の間違いを確かめたりすることがなく、発信一方の学習者もある。（学習者K）

以上、グループⅡの学習者は日本語能力が不十分なためにコミュニケーションに消極的になっているか、日本語力があっても、それを使って日本人と話し、日本社会に溶け込もうとする意欲が薄いと思われる。

表1 各学習者の特徴と、認識されたグループ

グループ 学 習 者 (学 年)	Ⅰ						Ⅱ				
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K
日本語能力の自己総合評価	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×
日本語運用時の自己モニター	○	○	○	○	○	○	×	×	×	○	×
日本語学習方法の案出	○	○	—	○	○	○	×	×	×	×	×
専門科目での困難への対処法	—	○	—	○	—	○	×	×	×	×	—
コミュニケーションへの積極性	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	○

総合評価の欄で、○は自分の日本語能力に満足している者、×は不満足な者、その他の項目で、○はできていると思われる者、×はできていない者を示す。—は特に言及なし。

3. 2年間にわたる縦断的調査の結果

その後、この11名について、学習者の大学生活の節目ごとにインタビューを続けた。グループⅠの学習者には1年に一度、グループⅡの学習者にはおよそ半年ごとに、研究室に来てもらってインタビューした。特にグループⅡの学習者については、各回40分ほど学習環境の変化や日本語能力の向上などについて詳しく聞き取り調査を行った。

また、それ以外の留学生についても機会を見ては話を聞いて参考とした。日本語の授業は1年生4コマと2年生1コマのみであるが、その後も日本語の添削の依頼や他の相談等のために来訪する機会があったため、それらを利用してインタビューを行った。

3.1 グループⅡの学習者の経過

まず、日本語自律学習技能を獲得していないと思われたグループⅡの学習者の経過について報告する。

非漢字圏出身の学習者Gは、2005年の聞き取り調査では、親しい特定の日本人学生の助けを全面的に借りて意思疎通を図っていた。しかし、2年生の時に実験を通じて他の日本人学生と実験の手順など話し合うようになって、彼らの性格の違いや、話の中の冗談などの意図が理解できるようになり、会話力に自信を得た。研究室に日本語の上手でない留学生が入ったとき、通訳代わりの役割を果たしてさらに自信を増し、アルバイトを始めて職場での新しいコミュニケーションに挑戦するようになった。

学習者Hは専門科目に対して先輩や友人に頼ることなく苦勞しながら立ち向かっていて、徐々に自己の日本語能力の向上を自覚しつつあった。研究室配属の時に自ら、予定されている指導教員が厳しい先生だから変更希望を出せるかどうかという相談を携えて筆者を訪れた。筆者は、これからは日本人学生と共に厳しい指導に立ち向かうことになる、本当の意味で日本社会に溶け込むことにチャレンジするよう励ました。その後、卒業研究を進める間に研究室仲間と親しくコミュニケーションするようになり、論文は英語で書いたが、中間発表や卒論発表は日本語で行った。就職活動の際に、日本語学習の参考書を求めて再び筆者のもとを訪

れたが、自分で本を選んで持ち帰った。即ち、この時までには、自ら学習すべき内容を認識し、それを学習する方法も考案できるようになっていたのである。

学習者Iは半年ごとのインタビューでは、あまり日本語力に変化はない、日本語で書く卒論に苦勞していると述べていた。卒業研究は研究室のテーマに沿った内容でなく、母国の科学教育を考察するものだったので、指導教員の指導の下に独自に資料を集めて卒論を書き上げた。それを母国で発表し、有意義な議論を経験したようである。就職のための自己アピールや志望動機を書く際に添削を求めて筆者を来訪し、その後就職試験を挟んで数度にわたって訪れ話してくれたことによると、本人が大きな自信と満足を得たのは、卒業論文を日本語で書き上げたことと、就職の面接のために何度も書き直して完成させた文章に自分の研究や志望動機、自己アピールを十分に盛り込むことができ、それが実際に面接で相手に受け入れられたことであった。

一方で、学習者Jは研究室の雰囲気になじめなかったらしく、無難に卒業研究をこなして日本企業に就職したが、留学の成功は認めても、二度と研究室生活は送りたくないと述べ、日本語能力はほとんど変わらないと自己評価している。実際、送別会での挨拶は全く型どおりのものだった。

学習者Kは特定の友人はいたが、研究室に入って不適應を起こし、現在は不登校の状況である。不登校が長期化する以前に話を聞いたときには、日本語能力に変化はない、専門の語彙は増えても日本人と話が通じない度合いは変わらないと自己評価していた。

以上、グループⅡの学習者のうち、全体的に日本語能力が低く自信がなかった学習者GとHは、日本人学生との接触が増え、研究室に適應できるにつれ、日本語能力も向上し、自信を得てコミュニケーションにも積極的になった。自分に不足している日本語の技能を的確に認識できるようになり、自分なりの日本語学習方法を実践し、日本語教員による添削の必要性があると感じれば助力を求めに来るようになった。

しかし、日常生活が支障なく送れるのにそれ以上の

コミュニケーションを求めようとしなかった学習者 I と J は、研究室への適応が重要な分岐点になって2つの方向に分かれる。研究室に入った時点で、指導教員と打ち合わせ、討議して十分日本語を鍛えた I と、適応できずに個人の卒業研究だけのために時間を過ごした者 J とでは、日本語能力の向上に対する自己評価が大きく異なる。

学習者 K の研究室不適応は、中間発表の不成功を機に起こった研究不適応（日本人学生にもよく起こること）なのか、他の大学院生との人間関係に基づくものなのか（指導教員の見解）、本人は他の理由をあげているため、真相分からない。ただ、一方的に発信はするが相互的なコミュニケーションが難しい彼の日本語力のあり方に原因の一半があるのは確かであるように感じられる。

3.2 グループ I の学習者の経過

グループ I の学習者は全員問題なく研究室生活にも適応し、順調に留学の成果を上げている。

彼らの述懐の中で自信を得るきっかけとなったと報告されたのは、研究室での輪講での発表、卒業研究と卒論執筆・その後の発表などによって日本語を鍛えたこと、就職のため履歴書など書類の準備をしたこと（自己アピール、研究計画書、志望動機などを自分で書いて、周囲の人に添削してもらい、面接に備えて覚えるという、集中的に日本語を磨く経験）などである。

第1回調査で最も積極的に自分の日本語を日本人らしくしようと試みていた学生は、論文で論理的な表現も学習し、待遇表現も周囲の観察から学んで、自分が日本文化を体得してしまっていると語った。インタビューはちょうど就職試験の前だったのだが、面接練習で教えられたような型通りの「国際的架け橋」となることが夢だという発言を面接で実際にすべきか迷っていた。自分らしさを出さなければ社会人は務まらないとアドバイスしたら、迷いが晴れたと語った。

3.3 その他の学生の経過

その他、2006年以降に入学した学生にも折に触れてインタビューをした。特に非漢字圏出身の留学生には「新入生インタビュー」として、5月初めに学習の様子を聞き、問題がありそうなら、折に触れて面接した。

学習者 L は2007年入学でマレーシア出身の女子学生

である。日本語能力も低くなく、同じクラスに数名の女子学生がいて、共に授業を受けたり食事したり、人間関係でも専門科目の履修にも問題がないように思われた。しかし、1年生の後期に、話すのがもっと上手になりたい、話し相手を紹介してほしいと相談に来た。グループで行動して日常的なことは話しているが、話があまり深まらない。話すスピードが速かったり方言が混じると分からないこともあって受け流して聞いている自分が嫌になったという。同じ学科の上級生を紹介したが、あまりうまくいかなかったようである。現在2年生後期だが、同国の友人と離れてアパートを借り、日本語のクラスに参加して言葉を増やそうとしている。アルバイトもしてみたいという。

3.4 縦断的調査のまとめ

以上の調査から示されるのは、2005年の調査で自律学習能力が不十分であったがその後の2年間で積極的に日本語能力を伸ばした学生は、日本語を使って大学生活の中で自立していくことに成功したのだということである。日本人の人間関係の中で自己開示できるようになり、大学生としての社会的アイデンティティを獲得するために行動できるようになったということである。この過程を次の章でくわしく考察したい。

4. 考察

留学生が日本語を使って自立を獲得したという具体的な表れは以下のような点に見られる。

4.1 人間関係と自己開示

2年間の縦断的調査で明らかになったことは、自己の日本語能力についての満足度は、日本人の中で親しい人間関係が構築できて、そこで自己開示ができているという実感の度合いだということである。それには社会文化的な言語能力の習得が必要であることは言うまでもない。グループ II の学習者は、日本語力に自信がないうちは留学生同士のコミュニケーショングループの中にとどまっており、日本人と親しいコミュニケーションができると自信を得る。そしてその自己効力感²⁾から、アルバイトなど新しい人間関係で自分を試してみようとする。学習者 L は、明らかに、より広く自己開示ができるような深い人間関係を求めていると言える。

4.2 専門知識の獲得

日本語で講義を理解して、専門知識を習得し、体系的な技術を身に付けたり、単位を取得していくことは、学部学生としてのアイデンティティ確立のために重要な部分を占める。その成功は自己効力感となって次の課題に取り組む力となっている。

4.3 研究室生活への適応

研究室に入って卒業研究を仕上げることは日本人とのコミュニケーションを深める機会であると共に、仕事の仕方、教員や先輩学生との関係など、社会的な適応を迫られるものである。研究室で自分の役割を果たしつつ、アイデンティティを確立できるかが、課題である。

グループIの日本語自律学習能力を持っていると思われる学習者は、研究室での生活で、周囲の日本人の言動を観察して、待遇表現や文化社会的な表現を敏感に認識し習得している。

しかし、たいていの学生にとって理工系の研究室文化に適応するのは難しいようである。例えば、卒論研究の進捗状況を報告する際に大した成果がないとき、それをどのように報告するかにかなりストレスを感じるという。グループIの中には、日本人のやり方を取り入れ、指導教員の叱責を受け流す態度まで学んでいる者もあるが、日本的なふるまいを身に付けつつ、母国でのやり方との違いを認識してストレスを感じるほど、文化的側面を意識化している。

4.4 日本語での自立の過程

以上、縦断的調査の結果から、自律学習技能を獲得していった学部留学生は大学という日本社会の中で自己のアイデンティティを確立しつつ自立していったと観察される。それは自己開示の要求を満たし、専門知識を身につけ、研究室に適応し、卒論や就職という課題を乗り越える過程である。

したがって、大学院留学生については研究室という共同体への参加を目的とした効率的な学習が求められるだろう^{3,4)}が、学部学生はよりゆるやかな、それぞれの過程に応じて自律学習が行われており⁵⁾、それを支援するためには日本語教育の果たす役割が大きいと考える。つまり、入学当初から社会の中で自律学習技能を獲得するための言語学習ストラテジー^{6,7)}を積極的に

意識化する教育が重要な支援となると考える。

5. 教授法に対する示唆

学部留学生の日本語教育における問題点の一つに、クラスの学生の日本語能力、学習歴、学習目的、既得学習技能などが一様でないということが挙げられる。非漢字圏、漢字圏の学習者、短期留学生などが共に学んでいる。近年、学習者に目標設定や教材選択を求めて、自己評価表や学習記録などを通して学習カウンセリングを行うという自律学習^{8,9)}の試みがなされ、個別学習のためのEラーニング教材の開発も盛んである。しかし、筆者は大学における日本語教育では多様な学習者と共に学ぶところから得る教育効果が大きいと考える。日本語による人間関係を構築して自己開示を行うことは、各自で学習する学習目標からでは達成しにくいからである。多様な学生が同じクラスで学び、他の学習者から刺激を受けて、自己の日本語能力や学習方法を内省する授業こそが必要である。

具体的にどのような自律学習支援が必要かについて考えると、入学当初から様々な言語学習ストラテジーを意識させるために、まず以下の3つが挙げられる。

(1) 入学時の日本語学習環境の構築が重要である

自分の日本語使用環境をチェックし、日本語で話す範囲を広げる方策について考えさせる支援が必要である。新しい環境での最初の実践的な社会的モデルの観察と模倣には、社会文化的な理解が必要だからである。

(2) 専門科目学習への対応方法を提示する

対処に成功した学習者の体験例を示して、トップダウンの方法が講義の理解に重要であるということを示すことが有益だろう。専門科目での成功が大きな自信につながるからである。また、そのようなスキルや方略を使用する日本語授業も豊富に用意する必要がある。これは社会的ガイダンスとして有効だと思われる。

(3) 学習者のレベルに応じてアウトプットに力点を置き、自己モニターを促進するような授業を用意する

話す場面では、自他にモニターを試みるような支援が重要である。相手の発言の何が分かりにくいのか、自分が話すときに感じる困難はなにか、そのとき自分はどうするかなど、内省するようなきっかけを作る必要がある。その際、社会文化的な面についての学習者

の気づきも見逃さずに指導のきっかけにする。

書く力も同時に伸ばしていく必要がある。書く過程では語彙や表現などを何度も推敲できる。状況説明を筋道立てて行う、判断の根拠を論理的に述べるなど、内省に基づいた自己表現ができるよう支援する。

6. おわりに

今後は第5章に挙げた項目を授業で実践しつつ、自律的学習ができていると考える学習者の特徴である発話の場面での自己モニター意識やストラテジーの使用についてより詳しく観察し、言語学習ストラテジーの意識化に有効な方法をさらに具体的に考え、実践していくつもりである。

参考文献

- 1) アブドゥハン恭子：自律的な日本語学習能力—工学系留學生に対する聞き取り調査の分析—, 専門日本語教育研究, 第8号, pp33-38(2006)
- 2) バリー・ジーマーメン, デイル・ジャンク編著：自己調整学習の理論, 北大路書房, 東京 (2006)

3) 重田美咲：工学を専門とする大学院留學生の「正統的周辺参加」と日本語使用, 2007年度日本語教育学会秋季大会予稿集, pp. 113-118(2007)

4) ジーン・レーブ・エティエンヌ・ウェンガー：状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加, 産業図書(1993)

5) 相場康子：外国人留學生の勉学活動における日本と運用の成功の妨げになっているものは何か, 日本語教育学会春季大会予稿集, pp. 201-207 (2005)

6) レベッカ・オックスフォード：言語学習ストラテジー, 凡人社, 東京 (1990)

7) 宮崎里司・ネウストプニー共編：日本語教育と日本語学習, くろしお出版, 東京 (1999)

8) トムソン木下千尋：学習契約書を使った自律学習の試み, 第二言語としての日本語の習得研究第2号, pp. 23-56 (1998)

9) 桜美林大学日本語プログラム「グループさくら」編著：自律を目指すことばの学習—さくら先生のチュートリアル—, 凡人社, 東京 (2007)

Autonomous Japanese Language Learning Process for Undergraduate Foreign Students

- Insight from interviews -

APDUHAN, Kyoko

Department of Human Sciences, Graduate School of Engineering, Kyushu Institute of Technology

The objective of this research is to develop didactics to support foreign students attain their academic goal in the university. To extract the characteristics of autonomous learners, we conducted interviews to undergraduate foreign students and the person who has close contact to each student in 2005 and repeated the interviews for the next two years. We observed that with the undergraduate student's ability to build his/her own human relation environment, one can establish his/her self-identity, master one's academic knowledge, and adapt to one's research laboratory. We can say that the aforementioned procedure is a process for the undergraduate students to build self-confidence to use the Japanese language.

Therefore, we stress the importance of Japanese lessons to make them conscious to social language learning strategies, and to make them motivated in building their own Japanese language learning environment and reflect their language learning method.

Keywords: *autonomy in language learning, interview, language learning strategy*